

# ネイパル・アース キッズ～海～

## ■ 事業のねらい

水辺や森林における自然観察や調査活動等をとおして、身近な環境問題に関する興味・関心を高めるとともに、環境保全に配慮した生活の大切さについて理解を深める。



- 実施日 平成 24 年 6 月 16 日 (土) ～17 日 (日) 1 泊 2 日
- 参加対象 小学 4 年生～中学 3 年生 40 名
- 参加実績 参加者：16 名  
小 4 = 1 名、小 5 = 3 名、小 6 = 3 名、中 1 = 1 名  
男子 = 7 名、女子 = 9 名
- 備考 協力：北海道大学厚岸臨海実験所  
厚岸町環境教育推進委員会エコランド 2012  
活動場所：厚岸少年自然の家、筑紫恋海岸、チカラコタン  
愛冠自然史博物館

## 1 事業実施の背景



北海道環境教育基本方針では、北海道は現在、廃棄物や生活排水の問題等といった身近な問題から、地球温暖化、オゾン層の破壊、森林の減少等の地球規模に及ぶ問題など、環境問題が深刻さを増していると指摘している。

厚岸町では、環境教育推進のため、平成 8 年に厚岸町環境教育推進委員会が設置され、地域の特性を生かした環境教育を推進しており、平成 20 年には、小学生を対象に環境教育をテーマとした事業「エコランド」を開催しているが、その後、継続されずに現在に至っている。

そこで、本事業は、厚岸町環境教育推進委員会の協力を得て、道東の優れた自然環境に目を向けさせ、環境に対する関心を高め、問題解決能力を育成するとともに、知識を習得するだけでなく、日常生活の中での様々な環境問題に取り組むことができる実践力を身に付けることを目指し、実施するものである。

プログラムの展開にあたっては、アマモ場が広がる厚岸筑紫恋海岸とカキを養殖する厚岸湖、別寒辺牛川流域の湿原（ラムサール条約登録地）、約 1 万ヘクタールの国有林パイロットフォレスト等、厚岸の豊かな自然環境をフィールドに、海、湿原・川、森の 3 回シリーズで、水辺から環境について考えていくこととした。

第 1 回目の今回は海をテーマに展開する。

## 2 プログラムデザイン

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
6/16 (土)	受付 10:00～10:30				受付	開 会 式	仲 間 づ く り	持 参 弁 当	<b>海から環境を考える</b> ○実習船（うみあいさ号）での海洋実習 ○海の生き物の観察 ○愛冠自然史博物館見学 ○海を守るために私たちにできること 協力：北海道大学厚岸臨海実験所 講師：仲間雅裕氏（北海道大学教授）					夕 食 ・ 自 由	活 動 の ふ り か え り	入 浴 自 由	就 寝
6/17 (日)	起 床	清 掃	朝 食	点 検	活動のまとめ と交流		閉 会 式	解散 11:30									

## ■ アクティビティについて



### ■ 意図

- 船に乗って実際に海へ出て、アマモ場に生息する生き物を採取し、観察する体験を通して、海の豊かさを感じ取り、たくさんの生物が生息するために必要な情報をつかませる。
- 厚岸の海や湖には、アマモやカキ、数え切れないほどの種類の魚やエビなど、多様な生物が生息していることから、この恵まれた海や湖の環境を守っていくために、自分たちにできることを考える機会とする。

### ■ 留意事項

- 実習船での海洋実習など、水辺での活動の際には、参加者全員が安全に活動を行えるよう、一人ひとりの様子に目を配り、きめ細かな個に応じた支援を心がける。

### 3 活動の様子



#### ■ 活動の様子

1日目は、北海道大学教授で北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所所長仲岡雅裕氏の指導のもと、厚岸町筑紫恋の海岸で、実習船「うみあいさ」に乗り、沖合に生息するアマモという植物と、そこで暮らすたくさんの生物を採集し、その様子を観察した。

次に、場所を厚岸湖岸に移し、名産であるカキの養殖場を沖に見ながら、海岸線で見られる貝の生態について学習した。カキの殻に穴を開けて中身を食べてしまう貝が存在することに子どもたちは驚いていた。

その後、愛冠自然史博物館で、仲岡氏から本日のまとめのお話をしていただき、午後のフィールドワークを終え、ネイバルへ戻った。

夕食後は、フィールドワークの内容をグループごとにまとめる作業を行った。今回の学習でわかったことや気がついたことなどを一人ずつメモに書き出し、それぞれの意見を交流して1日目を終えた。

2日目は、前日出された意見等を模造紙にまとめ、題名や小見出しを付け、発表の役割分担を決めて練習をし、最後に各グループの発表を行って全日程を終えた。

#### ■ 参加者の声

- 海の中にも食物連鎖があることがわかった。
- 波の静かなところにアマモがたくさんあることがわかった。
- 海の中に棲むアマモが、陸の植物と同じように花を咲かせることがわかった。
- アマモは海の環境を変えることができることを知った。
- アマモ場が「海のゆりかご」と呼ばれている様子がわかった。
- アマモ場を守るために、ゴミを捨てたりしないよう心がけたい。

### 4 事業評価



#### ■ 参加者の変容【IKR調査結果】

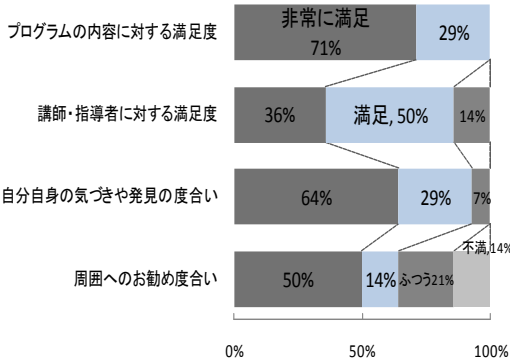
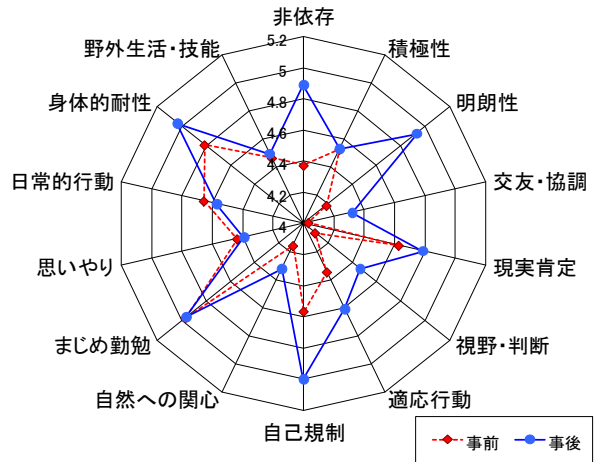
全体としては、5.6ポイントの向上。

大きな変容を示したのは、「明朗性」が0.7ポイント、続いて「非依存」が0.5ポイントであった。「自己規制」「視野・判断」は0.4ポイントの向上が見られた。

#### ■ 結果の分析・考察

「明朗性」、「非依存」の向上については、「グループ活動」や「話し合い活動」を通じて、初めて出会った参加者が、お互いの意見を出し合い、グループとしてのまとめを完成させたことによるものと考えられる。

「自己規制」の向上については、事業期間中、集団生活をする中で、自分の思い通りに物事が進まないこともあり、場面によっては相手の思いを尊重しなければならないことも必要と感じたものと考えられる。



### 5 まとめ



#### ■ 成果

- 北海道大学教授の仲岡氏の説明から、生物のすみかとしてのアマモ場の重要性など、海の環境について、専門的な質の高い情報を得ることができた。
- グループでの活動など、仲間とかかわりを持つ場面を多く設定したことにより、参加者同士が協力して物事に取り組み、学習を深めることができた。

#### ■ 課題・今後の方向性

- 運動会の時期と重なったこともあり、参加者数が定員に満たなかったため、開催時期等について検討する必要がある。
- IKR調査結果から、「明朗性」、「非依存」、「視野・判断」を含む「心理的社会的能力」の向上は見られたが、「自然への関心」については、予想していたほど向上が見られなかったため、プログラムの内容や組み立てなどを検討する必要がある。